

人間発達学部子ども教育学科 ななめプロジェクトプログラム 事業報告

都城市連携事業 市民講座

「こどもまんなか都城」応援シンポジウム

～生徒・学生が語り合う「都城の子育てとその未来」～

宮内 孝
藤本 朋美

1 こども家庭庁発足とこども基本法施行

令和5(2023)年4月、こども家庭庁が発足し、同時にこども基本法が施行された。

こども家庭庁は、こどもがまんなかの社会を実現するために、こどもの視点に立って意見を聴き、こどもにとっていちばんの利益を考え、こどもと家庭の、福祉や健康の向上を支援し、こどもの権利を守るためのこども政策に強力なリーダーシップをもって取り組むための組織として位置づけられている⁽¹⁾。

こども基本法は、すべてのこどもや若者が将来にわたって幸せな生活ができる社会を目指して、こどもや若者に関する取組を進めていくための基本となる事項を定めた法律である。ここでは、こども施策の基本理念のほか、こども大綱の策定やこども等の意見の反映などについて定められている⁽²⁾。

2 「こどもまんなか都城」の実現を目指して

こども家庭庁の「こどもまんなかアクション」と連動して、都城市は「都城市こどもまんなか会議」を令和5年8月に発足させた。この会議では、こどもたちのために何がもっともよいことかを常に考え、こどもたちが健やかで幸せに成長できる「こどもまんなか都城」の実現を目指すための施策の検討を予定している。

本事業は、「こどもまんなか都城」の趣旨に賛同し、その実現に寄与することを意図している。

3 事業の概要

都城市内の中学生・高校生・大学生・社会人が、それぞれの視点で「子育て」の未来を語り合いながら「こどもまんなか都城」の実現をめざす。

4 事業の背景とねらい

1) 「ななめプロジェクト」の取組みとして

子ども教育学科は、大学生とななめの関係にあ

る高校生とが共同で、保育士・教員不足、不登校児童生徒の居場所づくりなどの地域課題解決をめざす「ななめプロジェクト」に取り組んでいる。本事業は、この「ななめプロジェクト」に中学生と社会人を加えた取組みである。

近年の出生率の低下、児童虐待やヤングケアラーの増加、待機児童の解消、アフタースクールの充実、いじめ問題などの子育てにかかわる地域課題をテーマとして、中学生・高校生・大学生・社会人の四世代がそれぞれの立場で語り合うシンポジウムとする。

2) 主体的に地域課題解決に取り組む態度の育成を目指して

中学生、高校生は、総合的な学習(探求)の時間等を通して、また本学の学生は授業やボランティアを通して、子育てにかかわる地域課題解決に取り組んできている。それぞれの取組みの共有を通して、自己の学びを深化・統合させるとともに、社会を構成する一員として進んで地域課題解決に取り組む態度の育成を図る。

5 「こどもまんなか都城」応援シンポジウム (共催 都城市、後援 こども家庭庁)

令和5年12月2日(土)、本学都城キャンパス2102教室にてシンポジウムを開催した。前半部を中学生・高校生・大学生による提案、後半部を代表者によるミーティングとして構成した。提案テーマとミーティング参加者及び内容は以下のとおりである。なお、ミーティングには社会人の立場からこども家庭庁より工藤純氏に参加いただいた。

1) 提案発表

(1) 親子の居場所づくり

(南九州大学人間発達学部子ども教育学科 平田理佐)

(2) リサイクル活動について

(都城市立妻ヶ丘中学校 長澤杏奈・山下初

夏・原村希叶・相馬あきら)

(3) のくにプロジェクト

(宮崎県立都城商業高等学校

共創ウェルビーイング部

奥雪乃・林来瞳・岩松奈央・辰野聖良)

(4) 子どもの虐待を減らすためには

(宮崎県立都城西高等学校

久木原愛結・河野百合子・原屋敷くらら)

(5) 育児の負担軽減について

(宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校

黒仁田陽愛・蒲生帆柊・濱川苺々・新增みや)

(6) 開けばすぐわかる!子育て支援アプリ

(南九州大学人間発達学部子ども教育学科

清原綾乃・桐野恋歌・加藤捺希・佐藤美咲)

2) ミーティング参加者

渡瀬 由那 (妻ヶ丘中学校)

黒仁田陽愛 (都城泉ヶ丘高等学校)

泉 暁瑠 (都城西高等学校)

辰野 聖良 (都城商業高等学校共創ウェルビーイング部)

加藤 捺希 (南九州大学)

坂本 琴音 (南九州大学/司会進行)

大城 美璃 (南九州大学/司会進行)

工藤 純 (こども家庭庁少子化対策室)

※内容に応じて前半部の発表者も参加した。

3) ミーティングの実際

大城 (ミーティングを始めるにあたって) お聞きします。こども家庭庁はどんなことをされている所なのでしょう。

工藤 こども家庭庁は今年の4月に新しくできた省庁、国の役所です。その背景として、先ほど子ども教育学科の平田さんの発表の中でありましたように、子どもや家族を取り巻く状況が厳しく、お母さんの子育てがとても辛いといった状況を踏まえて、省庁の行政の縦割りを無くすために子どもに関する保育、教育関係に関わる省庁を1つにし、こども政策を進めていくために出来た新しい省庁となっています。行っている活動として、保育園や認定こども園、お母さんの産後ケアやいじめの問題、虐待の問題など、そのような子どもや子育てに関わるいろいろなことを全般的に担当する国の機関です。

坂本 今回のミーティングの流れを説明します。まず、先程の発表について意見交換や質問等を行います。次に、その意見交換を踏まえ、子育ての未来について皆さんと話し合いを進めます。

それではまず、発表内容についての意見交換から始めます。

大城 では、まず南九州大学「親子の居場所づくり」について、質問や意見をお願いします。

私から質問させていただきます。「夕焼け親子ほっとスペース」というのを提案していただのですが、私が思ったのは、17:00～20:00の後の帰りの安全面などを確保するためにはどうすれば良いのかということと、親子で参加しないといけないのか、やはり親のことが虐待で怖いという子がいる中でその子どもたちへの対応を考えた方がいのかと思ったのですが、皆さんはどうすれば良いと考えますか。

黒仁田 実用的なものは分からないのですが、専用のバスなどがあつたらいいのかなと思いました。金銭的な面はまだ分からないです。

大城 場所が遠いと何台も用意しないとイケないのかということ、1台で全部回れるといいと思いますが、とても遠いところから来ている場合や地域的な面、人材確保の面としても難しい所はあるのかなと思いました。しかし、専用バスなどがあると子どもの安全が確保できるのかなと思いました。

工藤 子どもたちの送り迎えや安全をどのように確保するかの話で思った一つの案として、親子スペースの方で今日この日にスペースに行きたいという親子、お父さんお母さんでもお子さんでも迎えに行く親、夜遅い時間だったら送り迎えまでをその施設の職員さんやボランティアさんにやっていただく、といった形もひとつの安全だと思います。夜遅くなると大変だと思うので、そのようなアイデアはあるのかなと思いました。

黒仁田 夕焼け親子ほっとスペースは子どもの年齢の制限などはありますか？

平田 主な対象を小学校の高学年から大学生と考えています。大学生を含めているのは、ボランティアとしてのサポートを主に大学生に担ってもらおうということを考えています。理由としては、大学生は基本的に夜が活動しやすいといった点や、フリースペースなので大学生もスタッフというよりは自由に過ごしていい一人とすることによって、人材の確保が出来ると思いました。

帰り道については、そこは地域にたくさんの拠点を展開するということを提案しているので、自分の地区に5~6個はそういった居場所があると考えていただくと、すぐ歩いて送って行けるような距離になるのではないかと思います。

大城 歩いて送れる所にしたら送迎バスの利用はいらぬですね。

次に、妻ヶ丘中学校「リサイクル活動」について何か感じたことや思ったことがある方いらっしゃいますか？

リサイクルと子育てはどのようにつながると考えますか？

加藤 SDGsに取り組んでいる園を訪問したことがあり、その園の中では廃材を利用したおもちゃ作りを行っていました。子どもが廃材を利用して自分で作ったりしていました。

大城 どんな廃材がありましたか？

加藤 利用していた廃材には色々あって、例えば排水溝のネット、ダンボール、プラスチックカップ、木材、トイレトペーパーの芯、白いトレイなどです。

坂本 私自身も幼稚園実習の時に廃材を利用した遊びを経験しました。そこでは、子どもたちの遊びが広がっていて、子どもたちの発想で色んなものを作っているの、私たちが考えつかないものもありました。子どもたちなりに遊びを考えてやっているので、そういった面で利用するともっとより良くなっていくのかなと感じました。

大城 園では廃材をどのように集めていらっしゃ

るのでしょうか。

加藤 園児の保護者の方が持ち寄っていただくことが多いと思います。

大城 渡瀬さん、色んなボランティアをされると聞いたんですけど、妻ヶ丘中学校の取り組みを聞かせていただけたら嬉しいです。

渡瀬 はい、妻ヶ丘中学校では、私は先月まで生徒会長をしていたのですが、地域とのかかわりを持てるようなボランティアやイベントの企画をよくしていました。その中でも、高齢者から子どもまで幅広い年齢の方々が交流できるようなそんなイベントを企画することを意識して行ってきました。今話題となったリサイクルの件に関して思ったのは、リサイクルを親子ですること、親子関係の良好も図れますし、子どももリサイクルに関して、知識を広げていけるきっかけにもなると思います。リサイクルを親子で行うときも、重要さや子どもがリサイクルについて学べることは、すごくいいことだと思いますし、未来につなげていけることだなと思ったので、経験からするとすごくいい案だと思います。

大城 リサイクルに生かすためにはごみの正しい分別が必要になると思いますが、学生だと、白色トレイや色付きトレイをそのまま捨てていいのか、どうしたらいいのかわからないこともあります。そうしたわからないことを聞くことが大切だと思います。自分より世代の上の人たちとの交流が学びにつながるし、皆さんの発表のように、いろんな世代と交流することが学びにつながっていくという風に私も感じました。リサイクルが健康につながるという話もあったので、リサイクルの大切さをもっと共有できるような場をつくっていただけたらいいなと感じました。

大城 では次は、都城商業高校「のくにプロジェクト」について協議していきます。何か質問、意見のある方はいらっしゃいますか。

黒仁田 質問なんですけど、スライドで出てきた「ステークホルダー」の意味がちょっと分か

らなくて教えてほしいです。

協議しました。

辰野 「ステークホルダー」というとちょっと難しい言葉になってしまうのですが、簡単に言えば、イベントを通して、どんどん人とつながっていきけるような、色んな参加者とイベントを通してつながった人たちのことです。

大城 「ウェルビーイング」についても分かりやすく教えてもらえますか。

辰野 「ウェルビーイング」というのは、みんな幸せとか健康とかすべてを含めた幸せという意味が入っています。私たちの部活名にウェルビーイングを採用した理由としては、私たちの活動を通して都城の人と人がつながってみんな幸せになっていくような取り組みをしたいという意味で名前にウェルビーイングを使わせていただきました。

工藤 ウェルビーイング部の皆さんたちが、皆さん自身で、プロジェクトみたいな感じで地域をよくしていくことを進めているのだろうと感じています。先ほどの発表の中でサミットという話がありました。まさに子ども家庭庁がやろうとしていることです。子どもや若者の皆さんの意見を実際に聞いてそれを仕組みや政策に落とし込み、反映させていく。反映させられない時は何でこれができないのかということをご皆さんに伝えることをやろうとしています。まさに子ども家庭庁がやろうとしていることをウェルビーイング部の皆さんが実践されてると思いました。そのサミットの中でどういうことやったのか、詳しく聞きたいです。教えてください。

辰野 サミットは、今まで3回開きました。1回目のサミットでは、10年後の都城にはどのようなものがあたらいいのかという大きな課題を掲げてみんなワールドカフェ形式で色んな紙にみんな意見を書いていくという形で開催しました。2回目、3回目は課題を少し具体的にして、これから私たちがしたいことを先に掲示してどのようにすれば開催できるか、どのような内容ならもっと子どもたちに寄り添える形になるかということをご皆さんで

工藤 3回に分けて少しずつ少しずつやりたいことを具体化していった提案するということなんだらうと思います。その提案してもらったものを社会人の私たち、それは子ども家庭庁もそうですし、県や市の職員の方が、皆さんが思っていることを実際に、そういう仕組みにしていかなければならないということなので、皆さん自身でプロジェクトを進めていくことはすごく重要なのだらうなと思っております。

大城 高校生でこんなプロジェクトをしているのはとてもすごいなと、率直な感想です。

次は、都城西高校「子どもの虐待を減らすためには」について、意見がある方いらっしゃいますか。

黒仁田 私たちの班もちょっと通ずるものがあります。母親の産後うつを挙げましたが、調べていくうちに、父親の産後うつも同じ割合で起きてるらしく、父親の方は、子育てをするという習慣があまりないから相談する相手がいない。だから、子育てブックには、そういう父親目線での辛いことや大変なことも取り上げるとよいかと思います。父親の育児休暇取得率も上がってるので、そういう目線でもいいのかなと思いました。

坂本 今は、父親も一緒に育児をしていかないといけないと社会でも言われていて、母親だけに目線を当てたらだめなのだ今すごく感じています。発表をしてくれた都城西高校の方はどうですか。それを聞いて。

都城西高校発表者 実際私たちも父親に向けてのページを作ろうと考えていたのですが、あまり多くしてしまうと読むものが多くなってしまふので、母親と父親のセットで読むことだと思います。

大城 男性目線でこんなことが書いてあたら読みやすいとかこういう人だったら相談しやすいとかありますか。想像していただくことになると思うのですが。

泉 社会人ではないし、子どももないので、あまり分からないんですけど。想像だったら、一般的に男性の方が仕事をしてみたいな雰囲気があるから、育児休暇は本当に男性の方もしっかり重視していった方が良いと思います。

工藤 今の話の補足として、確かに今、昔と比べると男性も家事育児をしていこうという時代になっていっていると思います。ただ、一方で、男性の家事の育児の時間と女性の家事の育児の時間を比べると、我が国は世界的に見て、まだ女性の方が家事育児をしているというデータがあります。私たちより上の世代の、お父さん、お母さんの世代とかがまだ男性だからこうとか、女性だからこうとか、そういう雰囲気やイメージを持たれている方もいるのかなと思います。少しずつ、子育て当事者だけではなくて、周りの上の世代の方も含めて、これからは一緒に共働き、子育てを進めていこうということなんだと考えています。

大城 子育てハンドブックは、どこかの産婦人科に置いてあったりする予定であるのと、出生手続きみたいなのを市役所でするときと一緒に渡せたら、このハンドブックがどんどん広がっていくので良いのではないかなというふうに考えました。

では次、泉ヶ丘高校「育児の負担軽減」について意見交換をしていきます。

育児休暇が先ほどから話題になっています。小学校の先生が妊娠された際、結構ギリギリまで働いているということを知ったことがあります。小学校は運動会練習などがあるから、その時は結構大変だったという話を聞きました。公務員である小学校教員にもこのような状況があり、一般企業などでは全く育児休暇が取れないと聞いたのですが、こども家庭庁の工藤さんはこうした状況についてどう思われますか。

工藤 育児休暇の取得率を伸ばすということもそうですが、長く休んだ分、人がいなくなったときに周りの別の子育てしてない人がカバーして、それで他の人が辛くなってしまったりか、そういう職場は休みづらいし、育児休暇を取ってなくても早く帰って家事をすると

かしづらいので、そもそも働く時間を減らすとか、育児してる人もしてない人ももう少しハッピーな働き方にできるようにするというところがまさに今1月から始まった次元の異なる少子化対策というところで国が掲げている共働き・共育での推進というところになっています。

大城 「のくにプロジェクト」をしている中で、この問題を繋げられそうだったところとかありますか。

辰野 私たちの活動では、子どもだけをメインにするのではなくて、親子も高齢者もみんなが一緒になって楽しめるような活動をメインに活動しています。つながると思った点では、活動をする上で親子同士のお母さん同士だったり、お父さん同士だったりの会話もあると思うので、そのつながりでアドバイスなどがあればいいなと思ってこれからの活動に取り入れていきたいと思いました。

大城 渡瀬さんにかありますか。自分のこれまでの経験と重ね合わせてもいいです。

渡瀬 今までの発表をすべて通して言えることかもしれないんですけど、子どもが一人の家庭ではなくて、もっと二人とか三人とか兄弟が多い家庭は感じると思うのですが、年子だったりするとまた別の支援が欲しいとか、手のかかる子が多くなると思うし、子どもが多いと一人じゃない別の悩みも増えてくると思います。そうしたことに対応した育児休暇だったり、特別な支援とかがあったりするともっと嬉しいのではないのでしょうか。

大城 私は下に弟が二人いるんですけど、弟たちに手がかかってしまうと私はわがまま言いたくても言えないなど思うところがあったので、その余裕を親が持てたらいいなと感じます。

では、最後に南九州大学「子育て支援アプリ」について何か感じたこと考えたことなど、お願いします。

渡瀬 子育て中は、独特な孤独感だったり、母親でなければいけないという責任感だったり

あると思うのですが、仲間意識を持てるようなチャットとかシステムとか支援があると母親ならではの孤独感だったり、圧迫感だったりを軽減できると思ったのですごくいい提案だなと思いました。

工藤 まさに子育て中で、子育てだけをしていると産後うつになるというお話がありました。そういう状態をLINE オープンチャットなどで時には専門家の方と話して、適切な機関につなげていくことがすごく大事なことだと思います。

あともう一つが、そもそも保育園に入るときの手続きや子どもが生まれたあとの出生届など、いろんな手続きや届け出がいろんな場所にバラバラにあって、「子どもが生まれた時なにすればいいかわからない」「どのようなお金がもらえるのかよく分からない」という声をよく聞きます。そこを解決できるのがデジタル的に言えばアプリケーションで、子どもが生まれる前から生まれた後の手続きを一括化してまとめて、どこでも誰でも進めていくことができると子育てしやすくなるのではないかと思っています。

大城 ぜひこれが活用できたら、子どものためにも親のためにもなると思うので頑張ってください。

では、今回の発表の内容を踏まえて、子育ての未来についてこれからどうしたらいいか、具体的な取り組み、こんなこと自分だったらしてみたいなという想像でもやってみたいこと何でもいいので是非、こんなことあるよという方がいたら発表をお願いします。

辰野 高校生の17歳、18歳という年齢は子どもに一番近い大人のようなものなので、一番子どもに寄り添える年齢だと思います。その中で、イベントや公民館などでの交流をして、子どもと子どもに近い高校生が関われる場所をもっと増やしていけたらいいなと思います。

坂本 大学生としても、色々なボランティア活動で子どもと関わる中で、子どもたちは年齢が近いとやっぱり嬉しくて、遊びたいとか、一

緒にしたいとかいう気持ちで、なんでも気楽に話してくれるということを感じています。そういった環境がもっと増えて、そしてアプリとかでそういうのがもっと多くの人に周知されるともっとより良くなるのかなとすごく感じました。

大城 坂本さんは不登校支援もしているので、やっぱり歳が近い方が話しやすいというのを実際体感しているので大事な意見だと思います。

泉 私は学校で子どもの遊び場について調べていて、安全面の理由で公園の遊具がなくなったりして、あとはそもそも遊ばなかったり、インターネットとかを幼い頃から使っていて外にすら行かないという現状を知りました。妻ヶ丘中学校の発表でリサイクルするという話があった時に、私たちもリサイクルでおもちゃを作るというのを学校でやっています。今は昔より遊具とか少なくなっていったりしているから、子どもたちが遊べる環境を安全面も考えて優しいものを作っていけたらいいなと思います。

大城 どんどん遊ぶ場所も遊具も少なくなっているし、コロナもあって外に出れなくなった状況もありました。

辰野 今の意見に補足するという形になるんですけども、私の近くにある公園を見ていると、前は賑やかだったのに、今は誰一人遊んでいないとか、多分子どもが遊びに行きたいのに親が心配で遊びに行かせないという場合もあると思うので、南九州大学の発表でもあった「夕焼け親子スペース」といった安全性のある場所の普及も大事だと思います。

坂本 今の意見にとっても共感します。子ども達が遊ぶ約束をしていても「〇〇の家に遊びに行こう」というのをよく聞くので、外で遊ぶことが楽しいことの1つだということを広めていったり、またそこで何かイベントをすることも、子どもたちにとっては近くでやることで友達を誘って、また親子でというのがどんどん広まっていくのかなというのを感じま

した。地域での活動というのも少なくなってきているのかなということが実感できるので、そういったものをもっともっと増やしていつて普及出来れば子どもたちも楽しくなるのかなと思います。

大城 子育てハンドブックでそれを知らせる。子育て支援アプリで知らせる。加えて夕焼け親子ほっとスペースでその場を共有していけばいっぱい広がっていく。そして（都城商業高校の皆さんが）運営してくれる。あるものを活用していく。新しくつくるのも大切だけど、今あるものから発展していけばいい感じになりそうですね。

黒仁田 子どもの気持ちを理解するための「子どもの気持ち教室」のようなものがあるといいのではないのでしょうか。子どもなりの悩みや、子どもはこういうことがしたい、こういう傾向があるということを知ってあげる。なんでこんなことをしたんだろうということを理解できるように寄り添ってあげるといいのかなと思いました。

坂本 私たちが専門家から学ぶ場ということですね。知識がないと関わるのも難しいので、経験された方や専門家から学ぶというのは大切なことになると感じました。

大城 今の高校生の意見を聞いて、工藤さんはどう思われますか？

工藤 さっき大城さんがまとめっぽく言ってくださったと思うんですけど、いろんな居場所づくりから、リサイクルから、プロジェクトとして運営して虐待を減らす、育児への負担を軽減させる、そこにアプリを活用するというように、ここの皆さんと一緒にできたらいいのかなというふうにごく思います。ここの皆さんの中・高・大学生同士と一緒にされたりしたんですか？

辰野 「のくにプロジェクト」では、私たちと宮崎大学の大学生を参加者として都城サミットを開きました。その他にもこれからもっとサミットで終わるだけじゃなくて宮崎大学の

学生とか色々な学校とかとコラボみたいな形で一緒に活動していければと考えています。

大城 南九州大学も色々な高校生との関わりを持つようにしています。「チャレンジ運動教室」の動画が紹介されましたが、あの教室にも毎回高校生が参加してくれています。一緒に子どもと遊びながら、高校生は大学生のことを見て学んでくれているという活動を行っています。私たちより上の人達の世代との関わりが先生方・教授の方しかないの、そこをもっと広げていけたら、私たちの学びにつながっていくとお話を聞いて思いました。

工藤 先程発表の中にありましたように、色々な大学とか高校生とかと一緒に色々な取り組みをされていると思いました。社会人なので社会的な立場になってしまうのですが、皆さんのように、こういう子ども・若者の皆さんが地域で色々な活動をされている。色々な意見を出してくれるところを、大人のほうが、専門家もそうだし学校の先生もそうだし役所の職員も国もそうだけど、子どもたちが言っていることを大人側が支えていかないといけない。皆さんがこういう議論ができる場を大人が作っていかないといけないし、皆さんの意見を大人が聞かないといけない。こども家庭庁として頑張らなくては、ということをお話の素敵な話を聞いて思いました。

大城 さて、ここまで皆さんと「子ども達が遊ぶ環境を増やしたらいいのではないか」「色々な世代との交流を得て、色々な人が学び、子どもだけが頑張るのではなくて全世代の人が頑張っていけたらいいのではないか」といったことを話してきました。

ここで、都城市こども部 福永朱美部長に、私たちの話を聞いて、どのようなことを感じられたか、感想をお聞きます。

福永 今日は皆さんの発表を聞いて、素晴らしさに圧倒されています。皆さんが都城の子育てとその未来のために、子どもの居場所だったり、虐待問題であったり、少子化対策であったり、そういう様々な課題に対して、一生懸

命研究し、それぞれの視点で発表していただいたということに感動しています。この発表に行きつくまでの過程での皆さんのそれぞれの考えや意見をもっと聞きたいと思いました。

皆さんが思っているように私たちも子どもの居場所や虐待問題を重要な課題だと思っていて、色々考えているところです。来年度は「こども計画」の策定を計画しています。今回こうやって皆さんの意見を直接聞けて本当に良かったと感じていますので、今日皆さんから聞いた意見を「こども計画」に活かせるように私達ももっと頑張らないといけないなと感じたところです。

本日はありがとうございました。

大城 私たちの力だけでは根本的な課題解決にはならないかもしれないけれど、私たちの意見を発信することで、こども家庭庁の方や市の様々な方々が取り組んでくれる、その声援に応じて私たち学生も頑張っていかなければいけないと感じました。

また、それぞれの立場、子どもの立場で考える、保護者の立場、みんなの立場で考えることが大切だと感じました。

それではこれでミーティング終わらせていただきます。ありがとうございました。

注

(1) こども家庭庁 HP「組織情報」<https://www.cfa.go.jp/about>

(2) こども家庭庁 HP「こども基本法」<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-kihon/>

(1)(2)ともに、2024年3月18日確認